C04a　京都大学理学研究科附属天文台の天文教育・啓蒙事業の紹介

○上野 悟、石井 貴子 (京都大学理附属天文台)、他 天文台スタッフ一同

近年、天文学の観測装置は、どんどん大型化、海外・宇宙空間進出の傾向が強くなり、国民が身近な所でそれらの施設や観測現場に触れて学習できる機会が減りつつある。その様な中、青少年を中心とする国民に教育や研究成果の伝授を行なうべき大学の役割は重要となって来ている。より多くの人々に実際に国内の地上天文台での天体観測や装置を見聞してもらい、天文学を始めとする科学学習の意義、理工学の健全な発展の必要性を感じ取るきっかけを提供して行く必要がある、と私達は考えている。

京都大学大学院理学研究科附属天文台には、現在京都市内の花山天文台と岐阜県上宝村の飛騨天文台が属しているが、この内飛騨天文台では１９９６年から毎年夏休みの前半に、地域住民を主な対象とした天文観望会を行なって来ている。さらにそれに加えて、１９９９年の花山天文台創立７０周年記念に行なった花山天文台一般公開や、２０００年度に採択された文部省大学開放推進事業経費による「大学等地域開放特別事業」としての「太陽宇宙デジタルライブ」などを機に、毎秋に花山・飛騨両天文台の連携同日公開・観望会を開催して来ている。

前者は地域住民や児童生徒が参加者の大半であることから、アットホームな雰囲気の中、実際に観測機器に触れたり、肉眼でアイピースを覗いて観望したり、と言う内容に重点が置かれている。一方、後者の「デジタルライブ」は、その様な肉眼観望のコーナーを設けつつも、各天文台の複数の望遠鏡で得られた天体のデジタル画像をリアルタイムで他方の天文台にインターネット経由で転送・表示しつつ、音声面でも互いのスタッフや観客とが対話、質疑応答を行なうという、ＩＴ推進時代に対応したデジタル観望・遠隔セミナーが主要な出し物として用意されている。参加者も全国的に広く募集しており、青少年を中心に幅広い層の国民に天文学や宇宙科学、情報技術の実体や具体像に触れる機会を提供して来ている。

この講演では、これらの具体的内容や、実際的な運営過程の概要を、より詳細に紹介する予定である。